

みおつくし 福祉・介護の仕事 きらめき大賞選考会

【開催】 令和5年8月30日

【委員】 座長 鈴木 大介 (大阪成蹊短期大学 准教授)  
 座長代理 田淵 章大 (社会福祉法人 大阪市社会福祉協議会 地域福祉課担当係長)  
 委員 浅野 幸子 (公益社団法人 大阪介護福祉士会 会長)  
 委員 中本 勝也 (公益社団法人 大阪社会福祉士会 事務局次長)  
 委員 田中 綾 (一般社団法人 大阪市老人福祉施設連盟 理事)  
 委員 瀬戸 康男 (大阪市障害児・者施設連絡協議会 役員)

【講評】

賞	タイトル／受賞者	講評
最優秀賞	日々の彩りを求めて 倉橋 果歩 社会福祉法人 大阪自彊館 障害者支援施設エフォール	施設内での支援のほか、外出の提案や企画の実現によって、沈んだ表情が多かった利用者が明るくなっていく様子がよく描かれている。学生時代は福祉と関わりがなかったという作者が、2年目職員として生き生きと働いていることが伝わってくる。最後は支援者自身の成長にも繋がり、福祉・介護の仕事の魅力が伝わる作品。
優秀賞	さくらがみたい(…) わがままいつて いいの(?) 岩本 育也 株式会社そらいろ 訪問看護ステーションそら彩	日々の支援を通じて「屋外に出たい」「桜が見たい」という利用者の秘めた思いをくみ取り、利用者の人生を豊かにしたいという作者の熱意が伝わる作品。利用者の思いと支援者の葛藤、葛藤の末の選択がよく表れている。ご家族の思いもしっかり受け止め、利用者の思いを尊重しながら実現を目指すプロセスが表現されている。
優秀賞	第二の家族 ～「ありがとう」にあふれた仕事～ 河北 一貴 社会福祉法人 大阪自彊館 特別養護老人ホーム ジュネス	日々の「ありがとう」と、長期的な「感謝」があふれている介護の仕事の醍醐味、その両方が描かれている。利用者の好きな音楽を流したり、他の職種との連携など、福祉職に大切な「気づき」についても、よく描かれている。その人が生きてきた価値観を大事にするという、深い気づきを得られる作品。
特別賞	めぐり逢い 杉山 義彦 社会福祉法人 大阪自彊館 障害者支援施設エフォール	利用者とのやりとりがわかりやすく描かれており、言語によるコミュニケーションが困難な利用者が主体的にできることがないかと考えて始めてみた陶芸療法が次の取組へと繋がっていく。「こんな事をしたら良いのでは」ということを取り入れ、それが利用者の支援に繋がるといふ、仕事のやりがいや魅力がしっかりと描かれている作品。
特別賞	チーム崩壊。その後に生まれた『絆』 ～新型コロナウイルス クラスター発 生から得たもの～ 宮崎 聖菜 社会福祉法人 優心会 特別養護老人ホームこうのとり	コロナ禍において、エッセンシャルワーカーとして、いかなる状況でも利用者の生活を継続して支えるという仕事への誇りが伝わる作品。いざという時にはチームを超えて職場全体で支えあうことを当たり前のよう実践し、利用者の生活を支えるという共通目標に皆で同じ方向を向いて取り組める、という職場の魅力が描かれている。